

絵画にとってエロティシズムとはなにか

松島 淨

このタイトルにはエロティシズムを絵で表現することは難しいという自問が込められている。そもそもエロティシズムということ自体がわかったようでわかりにくいのに、さらにそれを絵で表現するというのだから、そのむずかしさは半端ではない。どうしてそんな迷路に入り込んだのかというと、わたしが絵なんぞを描きだしたからである。しかも素人だから子供がするように黙って絵を描くことを楽しめばいいのに、こともあろうにそれを意識的に考察しようとしているのである。

ところで私は最近「澁澤龍彦にとってエロティシズムとはなにか」という小論をあるところに書いたので、まずそれを要約、引用しておきたい。それで第一問のエロティシズムとはなにかについてある程度の理解が得られるだろうと思う。

澁澤龍彦の「エロティシズム」論について

沖縄の雑誌「脈」の次号の予告で、内田聖子さんの「澁澤龍彦論」が掲載されるということを聞いたので、私
絵画にとってエロティシズムとはなにか

絵画にとってエロティシズムとはなにか

も小論を書かせてもらうことにした。というのも、いま私は絵を描いていて、そのテーマが「エロティシズム」の表現だからである。エロティシズムといえば澁澤龍彦を抜きには語れない。ところがいざまとめようとすると、これが意外に難しいのである。私が漠然と考えていたものと彼の論がかなり違うのである。

つまり私の考えているそれは形而下的であり通俗的なエロティシズムであるのに対し、彼の論は形而上学的であり哲学的なのである。私のそれが庶民的で体験的であるのに対し、彼のそれは書斎派的であり思想的なのである。彼はもっぱら過去の西洋の文学や絵画を持ち出してきて紹介し論評をすることが多く、決して自分の体験などを語ることはない。そこが実感的に表現したい私とかみ合わない大きな理由である。この違和感は難解な哲学に感じるようなそれではなく、むしろ一九八〇年代の「オタク」に感じた違和感に近い。

ところで私が尊敬している吉本隆明に、彼の初期の著作である『神聖受胎』についての書評がある。これは一九六二年四月に「読書新聞」に載ったもので、タイトルが「昆虫少年の情熱」である。このタイトルは編集者がつけたものであろうが、テキストの内容を的確に表していて、さすが吉本である。つまりこれまで聞いたこともないような西洋の人物の文章などを引用、解説するさまが、まるで見知らぬ昆虫を採集して、分類し、学名を記す行為に似ているというのである。だからこの本は「昆虫少年の文体」で書かれている。

その上で吉本は澁澤が我が国にエロティシズムの思想を導入した功績を高く評価する。「一八世紀の自然哲学は、著者の手によって現代的な意義が与えられて蘇生する。サドはこの自然哲学の文学的体現者として、わが風土のなかで、本格的にはじめて澁澤龍彦によって紹介され、爆発した。昆虫少年は裁判に引き出された。」と書いた。ここで言われている自然哲学とはルッソーの自然哲学などを想起すればいいだろう。人間は生まれながらにして

自由であるというあの思想である。そうした哲学を根底にもって、サドは人間の心の奥に潜むさまざまな衝動をまるで昆虫少年が採集するように、丹念に細かく採集、陳列して見せたのであった。

ちなみに吉本隆明は澁澤龍彦のサド裁判の弁護側の証人として証言をしている。それは一九六三年九月の『サド裁判 上』に掲載されている。ここでも吉本はサドの本のなかに「自然哲学」が語られていて、それが当時の支配的な社会思想を批判することになっていたと述べている。ただ現代から見ると、サドの自然哲学は原始返りしており、あまりにも退行していると批判もしている。

ところで澁澤龍彦自身、被告人意見陳述でこんなことを述べていた。

わたしは、この世で最も猥褻意識の旺盛な人間は検察官ではないかと考えています。（中略）わたしは猥褻もまた二〇世紀における魔女妄想によく似た一種の社会的なヒステリー現象、妄想だと考えます。権力につながる人間がこの妄想を社会全体におしひろめるのです。自分たちの腐敗や不正を暴き出す文学作品や思想の書物に、猥褻という、本来どこにもありはしないものの名前を貼り付けて、自由な出版活動を社会から葬り去ろうとたくらみます。

法廷でここまで言える被告人も珍しいのではなからうか。昆虫少年たる澁澤龍彦の面目躍如たるものがある。さて肝心のエロティシズム論であるが「セクシャルな世界とエロティックな世界」という論文のなかでこんなことを言っている。

絵画にとつてエロティシズムとはなにか

絵画にとってエロティシズムとはなにか

ごく簡単に割り切って言ってしまうと、セクシャリティとは生物学的な概念であり、エロティシズムとは心理学的な概念である、ということができるかもしれない。（中略）とにかくこのような面から眺められたエロティシズムは、あらゆる実用主義的な活動（生殖や子供への配慮を含めた、あらゆる社会的活動）に對立するものであつて、ただそれ自体を目的する狂気の欲望なのだ。だからエロティシズムは悦楽、熱狂、錯乱、狂気などへ高まる宿命を持つており、祭りとか、饗宴とか、遊びとか、戦争とか、犯罪とか、あるいはまた芸術とか、宗教とかの方向を目指すのである。

ここで澁澤がこだわっている心理学的な概念とはなにを想定しているのであろうか。それはつぎのようなフロイトの性欲論だつたのではないかと考えられる。フロイトは「〔文化的〕性モラルと現代の神経症」（一九〇八年）のなかで次のように語っていた。

われわれが、人間の性衝動というものは本来は生殖という目的に奉仕していなくて、一定の種類の快感を得るのを目標としているという事実を考えに入れると、一層広い展望が開かれるであろう。性衝動がそういう形をして現れるのは、人間の幼児期である。そしてこの時期では性衝動は快感を得るといふ目的を性器ではなくて、身体の他の部位（性感帯）において達成し、したがって性感帯といふこの好都合な対象以外のものを眼中にいれなくてもよい。われわれわれはこの時期を自己性愛の時期と呼び、それを制限する使命を教育に割り当てている。というのは自己性愛に長く留まると、性衝動が後年手におえないものになり、また役

に立たないものになるであろうからである。次いで性衝動の発達は自己性愛から対象愛へと進むし、また性感帯の自治から、生殖に役立つ性器上位下への性感帯の隷属へと進む。この発達の間に、自分自身に身体から起こった性的興奮の一部は生殖機能に役立たないものとして抑えつけられ、また好都合な場合には昇華に供される。文化活動のために利用できる力は大部分は性的興奮のいわゆる倒錯的な部分の抑圧によって得られたものである。

ずいぶん長い引用になったけれど、これが当時、瀧澤が依拠していた心理学的概念の論理構造である。問題はこのフロイトが言った性衝動の抑圧をどのように受け止めるかであり、その疎外された現実からいかに自己表現をして行くかである。例のバタイユも言っているように「たしかに生殖のための性的活動から出発しなければならぬまい。エロティシズムはその特殊な一形式なのである」から。フロイトは性の発達段階を構想して小児性欲の段階から大人の性的目的が支配する段階へと発達することを目標にしていた。

問題はこの目的―手段の関係のダイナミズムをいかに把握するかである。目的と手段が転倒したものが「倒錯」である。われわれもまたこの微妙な性的関係のメカニズムから自由ではないということである。その意味では瀧澤と私とのエロティシズムの差異も案外小さいものかも知れないと思うようになった。性的関係の疎外の度合いによって、その打ち消しとしての表現行為の観念的度合が違って来るのではないかということである。瀧澤龍彦が観念的エロスであれば私は体験的エロスであるように。それにしてもピカソの絵にエロティシズムを感じないという瀧澤の感性はどうしても理解できないのである。

絵画にとってエロティシズムとはなにか

絵画にとってエロティシズムとはなにか

以上が私が最近沖繩の雑誌に投稿した、エロティシズムについての小論である。そこで確認したことは、エロティシズムがセクシュアリティに関する心理学的な概念であることであつた。つまり性にまつわる心のありようを指すものであるということである。たとえば私が絵を描くときに、女性のヌードを描きつつ、それを美しいものとして描く、あるいは隠された秘密を覗き見るような期待を込めて描くならば、そこに私にとってのエロティシズムが描かれたことになるのである。つまり性にまつわる事柄が期待を込めた、理想的な、夢のような想像として描かれたとき、それはエロティシズムが表現されたといえるのではないかということである。言い換えれば、絵画にとってエロティシズムとは、性の対象を作者が美しいものとして、欲望を喚起され、そのあこがれの対象を所有したいと想いつつ、描くときに発生する気分であると言えるのではないか。またそのような作者の想いは見る者にも共有されるわけで、そこでも当然エロティシズムは発生するのである。

絵画とエロティシズム

以上の考察をふまえて、美術史の中にエロティシズムを探してみたい。まずギリシャ神話から題材をとった、いくつかの作品を見てみよう。最初は最高神ゼウスの変身物語から見ていこう。全能の神、ゼウスはさまざまなものに変身することで、欲望するものを所有することができた。たとえば黄金の雨に変身して、ダナエにとりつく場面はいろいろな画家が描いている。古いところでは一六世紀のベネチアの巨匠であるティツィアーノがいる

(図1)。



図1 ティツィアーノ「ダナエ」(1564年頃)
美術史美術館(ウィーン)



図2 ティツィアーノ「ウルビーノのヴィーナス」(1538年頃)
ウフィツィ美術館(フィレンツェ)

絵画にとってエロティシズムとはなにか

ダナエは父アルゴス王によって塔に閉じ込められるが、黄金の雨に変身したゼウスによって愛され、身ごもる。ティツイアーノの「ダナエ」は自分に降り注ぐ雨を見上げながらうっとりとしたまなざしをしているところをうまく描いている。

私が注目する絵画におけるエロティシズムは関係の意識が想像されるイメージであること。その視点からすると、同じ作者の横たわるヴィーナス（図2）の像も、左手で性器をかくしつつ、挑発的なまなざしをする女性はエロティックだと言えないことはない。その表情に男性を意識する関係性が想像できるからである。

ところで同じ作者に「田園の奏楽」（図3）という作品があるが、楽器を持って座る男性はいずれも着装しているのに、そばにいる二人の女性はいずれも裸体であるというのは不思議な印象をもたらす。二人の女性が音楽と詩の女神である、ムーサとカリオペであるという解釈もなりたつであろうが、わたしはそれよりもこの絵がのちの一九世紀のあのマネの「草上の昼食」の前景ではないかと思ってしまう。着装して座る二人の男性とヌードの二人の女性という組み合わせがあまりにも符合するからである。

ここで再度ダナエに戻ることにする。「ダナエ」といえばもう一人忘れられない作者がいる。ウィーンが生んだ巨匠、クリムトである。

クリムトの「ダナエ」（図4）の特徴は何と言っても、黄金の雨の描き方である。この題材はクリムトのためにあつたと言っても言い過ぎではないほどである。クリムトはその黄金の雨をダナエの股間に思う存分注ぎ込んでいる。クリムトの面目躍如といったところである。その黄金の雨を受けて、ダナエは恍惚とした表情をして描かれている。クリムトのこの絵を好きな人は多いと思われるが、しかしこのダナエの物語を踏まえて、この絵を見る方が、

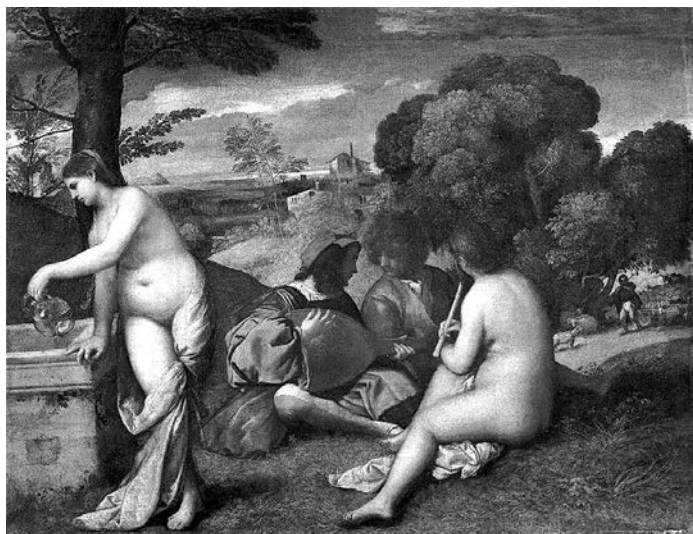


図3 ティツィアーノ「田園の奏楽」(1511年頃) ルーブル美術館(パリ)



図4
グスタフ・クリムト
「ダナエ」
(1907-1908年)
Galerie Würthle
(ウィーン)



図5 コレッジオ「イオ」(1531年) 美術史美術館(ウィーン)

そのエロティシズムは一層高揚すると思われる。

つまり絵の価値は作者がその絵をいかに描いているかにかかっているように考えている人が多いけれども、それだけではなく、作者が何を描こうとしているかという意味もまた重要な要素であるということである。

ゼウスの変身物語の第二のケースはイオの物語である。これは雲に変身してゼウスが愛人イオに会うという物語である。やはり一六世紀の画家、コレッジオが描いたイオの絵（図5）である。森のなか黒い雲に身を隠したゼウスがイオにくちづけをしようとしている絵である。全裸のイオが雲に抱かれて恍惚としているさまはエロティシズムにあふれている。

この絵について『ザ・ヌード―理想的形態の研究―』の中で、著者のケネス・クラークはこんなことを書いている。

「私はすでにティツィアーノのたくましい情熱とコレッジオの繊細な肉体の震えとを対照させて論じた。彼らは、官能世界の太陽と月である。そしてコレッジオがああ雲と化したジュピターの抱擁に身を任せるイオを描いた作品のなかで実現したものは、まさしくそのような夜の歓喜の世界である。彼女の輪郭線は（中略）いわば陶酔の典型のようなものである。これほどあからさまな欲望の満足を示す表現が精神の安定を欠いた人間に強い破壊衝動を惹き起こしたことも、われわれとしては理解することができる。」（ちくま学芸文庫、四六三頁）

絵画にとってエロティシズムとはなにか



図6 ミケランジェロ「レダと白鳥」(模写)

著者の興奮が伝わってくるような文章である。ゼウスの変身物語の第三のケースはレダと白鳥の場合である。この話はレオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロも描いたと言われるほどルネサンス期には有名な題材であった。

ここで紹介する作品は失なわれたと言われているミケランジェロの模写(図6)である。スパルタ王の美しい妻を見たゼウスは一目で恋に落ち、警戒されずに近づくために白鳥に姿を変えて接近し、レダとの愛を成就する。『西洋官能美術史』には「ミケランジェロは一五三〇年にフェラーラ公の依頼でテンペラ画の《レダ》を制作していた。残念ながらその絵は消失し、この作品はそれを模写したものだと言われている。白鳥はくちづけをかわし、片方の翼でレダの陰部を覆っている。フィレンツェのサン・ロレンツォ聖堂内にあるメディチ家礼拝堂の彫像《夜》も、このレダと同じポーズをしている。」と書かれている。また一九世紀初頭のロマン派の先駆者とい



図7 コレッジオ「ガニュメデスの略奪」(1531年頃) 美術史美術館 (ウィーン)

絵画にとってエロティシズムとはなにか

われるジェリコーにもレダと白鳥の絵がある。

ギリシャ神話の題材とはいえ、このような異類相姦のイメージは何かと物議をかもしたことが想像できる。ルネッサンス期の巨匠たちの作品が消失したのも理解できるところがある。異類相姦といえわが国の浮世絵にエロティシズムの傑作がある。一つは歌麿の「海女と河童」であり、もう一つは北斎の「蛸と海女の図」である。いずれも春画とみなされてきたものであるが、海外での高い評価もあって、近いうちにわが国でも公の美術館で公開展示されることが期待される。

ゼウスの変身物語の最後は「ガニメデスの略奪」(図7)である。ゼウスは女性だけではなく、少年をも寵愛したらしく、羊飼いの少年ガニメデスの美貌を愛したゼウスは驚に変身して誘拐し、オリンポス山に連れ行き、酒を注ぐ役をさせた。

このコレッジオのガニメデスの絵を見ると、私は子供を略奪、誘拐することの恐怖と戦慄を憶えるとともに、わが国の源氏物語に描かれた少女の略奪、誘拐の物語を連想する。たしかにこの絵は暴力的な行動であるが、しかしこの絵を見た時の戦慄的な動揺にはエロティシズムと同様の感覚が流れていると思われる。エロスの究極にある死を想像させるからであろう。サドの小説を読んだときのあの罪悪感に似た感覚を想い出す人もいるかもしれない。

さてギリシャ神話の奥深さにふれたところで、あの愛と美の女神のことに触れておこう。ヴィーナスについてはすでにティツィアーノの「ウルビーノのヴィーナス」のところでふれたが、わたしはボッティチェッリの「ヴィーナスの誕生」にはあまりエロティシズムを感じないのである。つまり立ち上がるヴィーナスよりも横たわるヴィー



図8 ブロンツィーノ「愛のアレゴリー」(1540-1545年頃)
ナショナル・ギャラリー (ロンドン)

ナスのほうがエロスを感じやすいのである。その意味では海に横たわるカバネルのヴィーナスのほうがいいということになる。私はヴィーナスのなかではブロンツィーノの「愛のアレゴリー」(図8)が一番好きである。

しかもこの絵に関する限り、好みが違う澁澤龍彦とも一致していることがおもしろい。この絵について、前述のケネス・クラークは「このヴィーナスは洗練され、華奢でしかも冷たく淫らなメデイチ家の時代のエレガンスを要約しているようだが、彼女のZ字型のポーズはフィレンツェ大聖堂のピエタに見えるキリストの死体から来ている。」と言っている。このクラークの説を踏まえて、澁澤龍彦が『裸婦の中の裸婦』という対談集の中で、次のように語っている。「全裸の愛の女神とキリストとが同じポーズをしているというのは、おもしろいじゃないか。もしかしたら死体の無力感と遊惰な肉体の倦怠感とは、共通するところがある

絵画にとってエロティシズムとはなにか

るかもしれない。先輩ミケランジェロの独創性をちゃっかりいただいて、まるで正反対の肉体を表現するのにこれを利用するなんて、ブロンツイーノという画家も、なかなかどうして隅におけないね。いかにもマニエリスムの代表選手らしいじゃないか。」

ここでのヴィーナスは息子であるエロスにくちづけをされながら、乳房を愛撫されて、気持ちよさそうである。少年エロスの下半身はまるで大人の腰つきをしているようではないか。

これまで美術史のなかでも古典的な作品にみるエロティシズムを検討してきたのであるが、わたしは女性のヌードを描くことが即エロスの表現になるとは思っていない。かかる性的な関係が当事者にとっていかに意識化されるかが問題なのである。その意識的対象化の仕方の中にエロティシズムが発生してくると考えるのである。その意味では極めて人間的な想像の世界なのである。

ここで古典的な作品から近代的な作品に目を移してみたい。近代リアリズムの巨匠であるクールベには当然ながらエロティシズムの作品がいくつかある。有名なところでは「世界の起源」と題された女性の性器の部分を克明に描いた作品などもあって、さすがリアリズム作家の面目躍如であるが、それが美しい絵画であるかと言われると写實的すぎて疑問が残る。それよりか私は同性愛を描いた作品(図9)を紹介したい。

この絵のクールベは古典的な描き方になっているが、それよりもタブーとなっていた同性愛の絵を堂々と描いているところに注目しておきたい。まさにリアルな現実を勇氣をもって描き切ったところはさすがである。しかしこの絵は個人収集家の注文で制作された作品だったので、当初は一般公開されなかった。いろいろな意味で時代環境を考えさせる作品である。



図9 ギュスターヴ・クールベ「眠り」(1866年) プティ・パレ美術館 (パリ)



図10 黒田清輝「野辺」(1907年) ポーラ美術館 (箱根)



図11 パブロ・ピカソ「ミノタウロスと女」(1936年)

わが国の近代絵画の巨匠の作品に注目してみたい。それはわが国の近代洋画の先駆者ともいえる黒田清輝の「野辺」(図10)である。

私がこの作品に注目するのは、作者の対象への視線の在り方である。この女性は仰向けに横たわっていて、顔を左に向けているが、あきらかに作者の位置はこの女性の足元にひざまずいている感じである。そこから女性の上半身を眺めているという位相である。この位相は私がこれまで繰り返し主張してきた、関係のエロティシズムの位相だということである。画面は上半身のみ切り取られているが、それでも関係の位相は充分に理解できるように描かれている。

最後に二〇世紀を代表するエロティシズムの旗手を取りあげて、この小論を終わりたい。それは澁澤龍彦があまりエロティシズムを感じないといったピカソのことである。ピカソくらい女性を愛し、その愛すべき対象を生涯描いてきた画家はいない。



図12 松島浄「対幻想7」(2015年)



図13 松島浄「対幻想8」(2015年)

絵画にとってエロティシズムとはなにか

ピカソはブラックとともに、キュビズムによって現代絵画を切り開いてきた作家であるが、ブラックがその後、静物画を中心に活動したのに対し、ピカソは愛する女性を中心にしたエロティシズムの人物画を追究していったのである。作家は自分が描きたいモチーフを一貫して追究することで、独自の世界を達成するものである。その意味でもピカソくらい自分の描きたいモチーフに忠実に、愛すべき絵を描いた画家はいなかったと思われる。私がこの小論の最後に彼を紹介する所以である。

今回、私は古典的な作品を中心に紹介、分析してきたのであるが、これは序論のようなものである。このテーマはどこまで継続できるかはわからないが、私としてはしばらく研究を続けて行くつもりである。

参考のために私の最近の絵画作品（図12、図13）を紹介しておきたい。二〇一四年九月に東京都美術館で開催された、「行動美術・東京展」に展示されたものである。批評と実作を並行して進めていきたいと思っている。

参考文献

美術手帖『ヌードの美術史』（二〇一二年）

岡田温司『聖書と神話の象徴図鑑』（ナツメ社、二〇一一年）

ケネス・クラーク（高階秀爾ほか訳）『ザ・ヌード―理想的形態の研究』（ちくま学芸文庫、二〇〇四年）

池上英洋監修・著『禁断の西洋官能美術史』（宝島社、二〇一三年）